

野曼德迦に就いて

藤井 周 慶

密教に於て現圖曼荼羅に出づる諸尊にせよ、また遺尊にせよ、それが研究の上に吾人が最も興味を覺ゆるは蓋し忿怒明王であらう。佛部の尊言ひ、菩薩部の尊言ひ、たゞひその字印形像等に於て、またその眷屬部類等に於て、密教のように具象的で且つ微に入り細を極めてはをらぬが、その多くは一般顯教にも顔出しゝてゐるし、諸天等部も亦吠陀以來印度宗教文獻にその名の見えぬものは少ないが、唯明王に至つては全く密教獨特の尊とも言ふべく、隨つて此等を考査することは一に能く該教の特徴を味識することになる。だから今自分も少しばかり此等に就いて述べて見たいと思ふが紙數に限りあること故、先づ比較的その名の知られてゐない野曼德迦尊だけに止めてをかう。

一、尊號及起源

野曼德迦 Yamantaka は Yama + antaka で死の神夜摩を征服するに名を得たもの。眞常は之れを靜惡作し義

野曼德迦に就いて

譯して衆生の惡業を靜めるし（稟承錄四八九右）、句義集下本には解釋衆生を譯してゐる。又この金剛號は Vajra-haraya (Rdo-rje-hugs-byed) であるより、一般に大威德明王を呼ぶるに至つた。してこの Bhairava は坦吐羅にそればシブの八異名の一、Yamantaka も亦同じく彼れに屬した稱號であるし、その性能が如何にもよく彼此一致する所より、(Tantrasa の中 Bhairavistotra 參照) 恐らく彼れをば西紀七世紀頃文殊の教令輪身即ち忿怒形的化現しして佛教中に取り入れたものでなからうか事實此の尊は摩醯首羅天若しくは天宮に最も密接な關係あるは華嚴軌（閏七十三左）を見れば何人も容易に了知し得らるゝと思ふ。或は又、一般宗教發達史上に見受けらるゝように、印度教興起し、シブの崇拜が盛んになつた時、佛教家が彼れの稱號、性質形像等を模倣して而かも彼れに對して超越的權能ありしたものであらうか。事實儀軌（閏七十三左）にも「忿怒暴怖事、能壞嚙娜

羅 (Rudra = śiva) 亦斷闇魔命」こあるは這般の消息を物語れるものであらう。特に華嚴軌には彼れのリンガ崇拜の思想までもそのまゝ取り入れてゐる。勿論、漢譯でもついしかその名も見えず、七世記の終り頃、菩提流志の八字文殊法に至つて突然あらはれて其後は多く文殊關係の經軌に出て來る。此の六七世紀頃は先きに言へる如く印度教起りて佛教を壓倒せんとし、就中、シブ神は日夜敬虔なる禮拜によつて其德を嘆へられ(西域記二、四)カーリダサは雄渾なる筆もて Kinnara Sambhava に彼れを畫き、Shaiva puṇḍrī 始め多くの富羅那更に稍々後れて種々のタントラは續々現はれた時代である。而かも此の雰圍氣中にあつて、突然現はれて來た威德明王は先述の理由に合せ考へて最早その史的關係を疑ふ譯にはゆかぬ。

さて此れは西藏にては *gshin rje* である。で西藏人民を喰ひ盡す惡魔 *gshin rje* を征する意味、蒙古では *Eng-jin jaghaq* でやはり同義である。(寺本師藏 *Loṇa Sky Rol-Pai Rdo-Rje* の佛祖像集による)併し承澄は先德の説として理趣釋經(問八)に諸明王が欲界諸天を降伏する説によつて、夜摩天を調伏するのだと言ふ。

二、教令輪身のいひ。

(a)、文殊化身。妙吉祥最勝根本大教經(成十二、仁王念誦軌(問七)根本文殊師利經(成九、疏六(餘五十)等には正法輪身たる文殊の化現だと言ふてゐるがこれ西藏所傳とも一致して異存あるべき筈もない。かの *Śrīvajrabhava tantra* に頂上文殊の面を載くこあるは猶ほ本地を指示するものであらう。

(b)、釋迦化身。耶曼德迦咒(百卷抄)に「爾時文殊師利童子大聲告曰、我今於此欲立大教、用之者發大慈心憶念釋迦牟尼如來兩足之尊化身耶曼德迦曠怒王」

こあるより見れば釋迦化身と見らるゝ。

(c)、彌陀化身。然るに日本密教では台東共に五尊を五部に配する中、此の尊を四方蓮華部に充て、無量壽如來の教令輪身とするこ近くは弘法大師の祕藏記(全集)五大明王義(八百五十七頁)に出でゝをる。しかし儀軌としては一行譯と稱する炎曼德迦萬愛法祕術如意法(續藏九ノ三、百八十丁右上)に

十方三世衆生敬愛六面頂上三面中面菩薩形柔軟也其面頂有阿彌陀佛

こあるこ立成軌に種子乾闥婆が説いてあるのみのやうに思はるゝが、口傳爲本の眞言教では必ずしも儀軌のみを無上教權とする譯にはゆかぬ。但し西藏喇嘛教でこ

れを大慈觀世音の化身としてゐるはこれと一致するものである。(Wadel; Buddhism in Tibet P 362)

(d)、阿閼化身。これは眞言の相傳にはなからうが宋慈賢譯の妙吉祥平等祕密最上觀門大教王經成四七
十二左には之れを車方に配し阿閼如來の化身としてゐる。

三、種子と三形。

一般に吃喇 *hah* 字を用ふ。これ元來訶羅伊引囉の四字合成であるから因位果上、觀自在尊のものである今之れを此尊のそれとするは或は自性輪身が彌陀であるを證すか。更に明法阿闍黎に問ふべきである。安然是胎金諸尊種子集日本藏三二〇に唵、弘法大師は覺 *hah*、婆 *hna* 台密の胎金圖説には胎は吃喇、金は吽、永嚴の圖像抄には瑟底喇合或は曼字とする。又三昧耶形は藏家にては尖端に觸體ある棒、日本にては如意寶棒(諸説不同記四佛敎金書本百二
十二P八十三圖)である。けれども禪林寺流には六幅輪或は八幅輪とし、永嚴も同説だと言ふ。尤も諸尊要鈔には智劍をも出し、實は寶棒を横へてその上に此れを觀するのだとする。

四、印相

此の尊の印契に就いては安然是胎藏大法對受記(日本藏六四P)に諸師の異説を擧げてゐるが、台密の四十帖決五帖(谷大寫本
三十四枚右)を始めとし、承澄之れを承け、

野曼德迦に就いて

又覺禪は「金剛智口決」によつて十六大印を擧げてゐる。

(一)根本印 (二)證身印 (三)心印(佛眼軌續藏九
百八十祕抄十三) (四)心中心印 (五)金印 (六)
捧印(檀拏印釋經中
間慶の印とす) (七)鉞印 (八)楯印
(九)劒印 (十)弓箭印 (十一)輪印 (十二)三摩
耶攝召印 (十三)羯磨法輪印 (十四)六度印 (十
五)大威德無比眼印 (十六)智牛王祕印(白牛王印)
此中、根本印と劒印と檀拏印とに就いては同異の論がある、根本印は立成軌に「二手内相又作拳、中指直豎、頭相合即成」にあるが劒印は名を出して相を説かぬ。そこで一説にはホコミ訓む所から小野抄は耶曼德軌によつて根本印の別名だとし、又一説には劒は絹索の意味だから二地二水二火をば索のように鉤し、二頭指と二大指の端とを相捻じ絹索形のようにする。之れ妄執結縛を除いて解脱を得せしめん爲である(阿婆婆抄説)。眞常は之れを心印の別名とし(眞承錄四八十
七左)、華嚴軌に輪羅印とあるも同じだ(同八十)。棒印も亦根本印の異名とする説と、全く別でこれは右の手、地水風を屈して掌中に入れ大指を以て横に地水風の上に置き直ぐに中指を立て、左手は拳をなして腰側に按くのだと言ふ(承澄説に依る)(參考。地二小指水二無名指、

火||中指、風||頭指、空||大指)。

五、眞言

立成軌には勝根本咒、心咒、心中心咒等多くの眞言を擧げてゐるが最もよく心咒が用ひらるゝ。心咒とは

唵・紇哩^二・瑟置哩^三合・尾訖哩^二多娜旦囊・吽。薩

Oñ hñh^合 Shñr^引 Vikñia(vā)dana hñh

嚩設咄論^二・曩捨野・塞檐婆野・塞檐^二婆野。

Sarvasatru in nāsaya Sāmbhaya Sāmbhaya

婆頗^二叱音・婆頗^二叱音・沙嚩^二合賀^引。

Sphata Sphata Svāha

瑟置哩は日本密家は悉曇文字でShñrに寫してゐるが、さて何のこゝか解せぬ。或は青龍寺軌に「摧伏一切怨家」にあるから nishñd ㄣ Satu の合成文字を女性形にしたものかも知れぬ。咒意は大體一切怨敵を亡ぼす祈願であるが却つて一々譯さぬ方がよからう。

六、尊形

(A) 單形。一頭兩臂兩足。

西藏にこの種を見る。通常は牛頭で兩臂あり、三目にして鬚髯の草鬘を有し、右手には斧、左手には劫波羅(Kapala)を持ち、宛も我が仁王尊のように頭から兩足に繒を垂れ兩端飛上してゐる所乗のものは別にない又露刊本 Oldenburg, Störnik Izabrazhenii Iusta But'ianov, Pl.

さに出づる像は極めて經猥であるが先端に劫波羅ある寶棒を右手に、左手に Sakti (Nis Ma) を抱きつゝ、骸骨皿?を持つてゐる。鬚髯を冠むるは前と同じであるが人頭三目で大炎髪を有し耳ミ足ミに環をはめ、而してこれはすべてに通ずる姿勢であるが右足を踏んぱり足を延ばしてゐる。臥水牛に乗り下に摩奴者を仰へ敷いてゐる。Foucher, E'tude sur l'Iconographie Bouddhique de l'Inde d'après des documents nouveaux, Vol II p. 56 二種を擧げてゐる第一のも之れと畧一致する。我が國上醍醐寺より頒布する五大尊中の像は前者等を拆衷したような型で、やはり人頭兩臂兩足で右手に戟を持ち、左手に捧印(打惡人)を結んでゐて、華座に乗る。但し藏蒙に見るような殘忍或は姪猥な所は更らない。米國ボストン美術館藏の我が平安時代の作は三面兩臂で蓮華台上に結跏してゐるは極めて珍しい。八大菩薩曼荼羅經(藏本ニコノ文見當ラズ)に「妙吉祥菩薩現臂六頭兩足金剛明王放青黑色光明齒咬下唇兩目及眉」にあるは六頭だけが増加した。

(B) 六臂六足形

最も普通の型で此の尊を一名六足尊と言ふ程である華嚴本經大威德軌(閏十三)立成軌を始あ疏六、根本文殊師利經十二(成九)千臂千鉢經(閏十三)廣大軌(二十

右)等皆之れである。「六」の数は立成軌によるに六足もて六趣を淨め、六面もて六度を滿じ六臂もて六通を成ずるを表徴する。現圖曼荼羅に於て金剛界は降三世會の西北隔に居し、皆、降三世の三摩地に入つて、忿怒拳に住し之れを香女菩薩に配するのであるから(飲光、隨聞記上^{九十}左)今の所論でないが、胎藏では持明院中央般若菩薩の北に位してゐる。身は玄雲色即ち青黑色で上下兩重各三面ある。正面のは宛もシブの Redhantiri のように正面は廣く口を開いて (Hemādri; Chaturvargachintamani 參照)、大笑四牙並び出で頂上中面菩薩形柔軟で右左の一手は根本印を結び、右の一手肘を開

典 名 左 a

オルデンブルグ本 Pl. 71

現 圖(石 山)

三鈷戟

輪

八字文殊軌(續藏三ノ一)
(五ノ左)

戟

弓

攝無碍經(縮藏及續藏本コノ
說ナシ今ハ百卷抄
所引ニヨル)

鉾 鏑

金 輪

萬 愛 法(續藏九ノ三)
(百八十丁)

鉾

弓

廣 大 軌(餘^三二十五左)

戟

弓

而して此現圖及八字文殊法を除く外は皆水牛に乗つてゐる。日本では東寺講堂の尊を始め、多く臥牛であるが

いて下垂拳右に向つて棒を持し、一手肘を舉げ肘を豎て身に向つて劍を持ち、一手は臂を開いて垂れ、拳を豎て左に向つて輪を持し、左一手は臂を舉げて身に向つて三胡戟を持ち冠續なく狗鍬を著け磐石座に坐して右三足を垂れてゐる(諸説不同記^{四に依る})。他は前述のと同じである。面に各三目あるは口傳は何であるか知らぬが恐らくシブに於けると同じく過現末三世達觀を意味するであらう。そこでこの六臂の持物に於いても經軌の上に多少の異同がある。今その主なるもの二三を舉ぐれば左の如し。

a''

右 b

b'

b''

却波羅

寶 珠

智 劍

三鈷杵?

根本印

劍

棒

印

索

劍

箭

梶

檀拏印

寶 劍

鉞鏑鉤

金剛寶印

輪 索

劍

箭

寶 杖

索

劍?

箭

棒

恵什の十卷抄によれば上醍醐寺般若僧正建立堂中安置の尊は立牛で之は萬愛法所説に憑つた者であらう。此

牛に就いても、水牛の自由に水中に浮沈する如く生死海に沈んで衆生を度すを詮すミカ、智を象徴すミカ、或は法華の大白牛車を以て説明してゐる。(五大明王義金集八百五十七尺參照)。宗義ミシは誠にその通りであるがこの牛こそは何等か印度教ミの因縁淺からざるを物語るものではないか。何ミなれば先掲の Hemadri によればシブが忿怒形的化現 Rudra-murti の所乗である。或は此處まで考へなくて今日印度教に見る Srinandri の類か又は單に西藏所傳や我が大原抄の此尊乗水牛「降炎魔義歟。彼尊乘牛故也」てふ位に止めて置くべきであるかも知れぬ。又、我が國智證大師の五大尊中のは馳を璽珞ミするミ傳ふるが、我々は西藏の之を見るのみである。奈良不退寺の尊が、劫波羅の璽珞を著するは猶ほ原始の面影を存してゐる。さて、此尊も萬愛法には最も大袈裟に出來てゐて、上下六面の頂上に阿彌陀佛、背に法形文殊を安じ、内院には子より亥に至るまでの十二神ミ外院には皆獅子に乘れる八大童子、東に召請、東南に計設尼、南に救護惠、西南に烏波計設尼、西に光網西北地惠、北方無垢光及び東北不思議によつて圍繞されてゐる。Foucher: Iconographie bouddhique Vol II P. 56 の第二形のはやはり人頭六面の尊である。

(C) 十二臂形

此れは極めて特種な形であるが法賢譯の妙吉祥最勝大教王經(三十右)には十二臂の尊像を説く。即ち右一は施願印、二は三叉、三は劍、四は鉞斧、五は寶杖、六は鉤、左一は期尅印二は槍、三は觀摩囉(Daman)四は寶棒、五は髑髏六は骨索を持つてゐる。此種の像はまだ何れにも見たことがない。

(D) 三十四臂九頭十六足形。

前款のやうな像が更に一轉して最も複雑な型になつたのは往々蒙藏に之れを發見することが出来る。プロンズ製やオルデンブルグ Pl. 61 一等がそれである。又かのゲッティ氏の出せる尼波羅の Tsogs-S'ing 京都博物館に峯氏の出品せる曼荼羅に畫かれてゐるは判然しないが此等ミ同種ミ思はる。而かもこれ亦立派に經軌が存してゐる。即ち S'rajna bhairava Tantara がそれであつて誠に詳細を極めてゐるから多少煩雜であるが左に之れを引かう。

(但し今原本が手元にないからグルンエーデル氏のを更に佛譯によりて再引する)

Il est libre de peindre, si, en plus du peintre, un Sādāka est présent; mais qu'aucun autre homme, un homme du monde ne le voie! (La figure regoit) seize pieds, trente-quatre mains, neuf têtes, (elle est) nue, de couleur noire, les pieds marchant, d'aspect plus que terrible, le linga en érection, c'est

ainsi qu'il faut peindre l'image. La première tête d'un tané-na, à côté de la corne droite trois visages : un visage bleu, un visage gris et un visage noir. Entre les deux cornes il faut peindre une figure et terrible, audessus la figure jaune et un peu irritable de Mañjuśrī. Les mains droites le couteau, une arme aiguë, un piolet, un couteau poignard en forme de foudre, une hache, une coque marine, une flèche, un crochet de fer, une pierre à fronde, la massue khāṭvāṅga, une roue, un fouet, un marteau de pierre, un glaive, le tambour Ḍamaru; les mains gauches un crâne, une tête, un bouclier, une jambe, un lasso, un arc, (en outre) des entrailles, un cloche, une main, de la toile à suaire, un homme empalé, un poêle, un morceau de crâne, un doigt menaçant, un trident pourvu de roubars flottants, de la toile fouettée par le vent; deux mains tiennent une peau d'éléphant fraîche. Sous les pieds à droite, un homme, un taureau, un éléphant, un âne, un chameau, un chien, une brebis et un renard, sous ceux de gauche : un autour, un hibou, un corbeau, un perroquet, un faucon, un paon, une poule d'eau et un cygne.

而してこれは一般に右足もて獸を左足に禽を踏へてゐるが、露版のは何か人に獸を左右各々に踏めるものゝ如く、ブロンズ製の最も複雑なものになる三三三の輪形臺座あつてその間をば魔獸・禽などが支へるせられてゐる。(Pander; Pantheon P. 64.)

七修 法

此尊は阿毘奢維法の本尊として立成就、華嚴本軌及佛說幻化網大瑜伽教大明觀想儀經^(成六十三)などに詳しく説かれてゐる。更に立成就には滅惡夢や相愛の仲をさく法、又八大童子法には延命法にて用ひらるゝ、もし最勝大教經には調伏の外に息災・增益・句召・敬愛等數多の成就法が示されてゐる。元來この尊は西藏や蒙古でも隨分民間に於て崇拜されてゐるそうであるが、之を基礎として莊重な宗教行事を行つたのは恐らく我が國に止まるであらう。輒ち今日こそ一般腦裏から去つてゐるが平安朝より鎌倉にかけて台東共に盛んにこの修法を行つたものである。その内容は苟くも事作法に互るを以て茲に述べべき限りではないか、唯密教文獻をたゞつてその二三の史實を記すに止まる。

文德帝に四人の皇子があつた。その御讓位の際、台密の惠亮は惟仁親王のために此等の修法を行じ、眞濟は同じく惟喬親王のために金剛夜叉法で祈り奉つたがさうして惠亮が勝つたから眞濟は非常に怨んだ。眞濟程の大徳としては承け入れられぬが、これ果して事實ならば教會史上兩密隔執の一事件であり、台徒は「朝家最重の洪基山門無雙の面目」だミスラ賞讃してゐる。天慶三年將門の亂には寛朝は成田に不動尊を以て調伏

法を修した際、八坂淨藏は之れに競ふて大威德法を行ふた。又東密で年々玉體安穩を祈り奉る後七日御修法の本尊が五大尊であると言ふまでもない。範俊は白川院御修法の際紀伊三位の屈服し仁平二年夏寛信はやはり範俊の後を追ふて立成軌により、此法で以て驗者蘭城寺大納言阿闍梨能祐を禱殺した事なご百卷抄に出てゐる。壽永二年七月平氏西海に走り義仲京都を侵襲するや十一月臺東の僧侶集つて百壇大威德供を蓮華王院に修し後白河法皇の玉體安穩及平氏、義仲の滅亡を祈つたことは最も有名である。其他、亡靈を降し、惡夢を滅するなごには屢々拜まれてゐるが人魔を降すに最も多く崇められ、之れが利己的になつては些々たる私憤をはらし、頼通の如き世俗官位昇進のためにも應用さるゝ至つた。實に威德尊こそ迷惑な話である。何れにしても我が國平安朝は、台は山門に寺門にその流れの盛んなるを競ひ、東は小野に廣澤にその華の麗しさを爭ふた事相の最隆盛期であつて、此際此の尊がかくも崇拜された事實は日本密教思想史の上から見て最も興味があると思ふ。

八、本軌に就いて

如上の引證に於て知らるゝ如く諸種の軌に散説されてゐるが最も有名なのは

○聖闍曼德迦威怒王立成大神驗念誦法 唐不空譯
○大乘方廣曼殊室利菩薩華嚴本教闍曼德迦忿怒王眞言大威德儀軌 唐不空譯

○大方廣曼殊室利童眞菩薩華嚴本教讚闍曼德迦忿怒王眞言阿毘遮嚧嚧儀軌品第三十一第三十二 唐不空譯

の三種である。而して此等は決して本來獨立の一經でなくて眞常の云ふ如く宋天息災譯の大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經二十卷二十八品と同一類である（諸儀軌裏承錄四^五八^十參照）。唐譯に淨居天とあるは原語 *Suddhāvāsa* を *Suddha* *avāsa* と見、宋本は之れを *Suddha* *avāsa* として淨光と義譯したものであらう。後二軌共に大方廣文殊室利菩薩華嚴本教とあるは宋譯にはないが、近者南印度 *Padma bhāṣyam* 附近から發見された梵本が（一九一〇年以後、*Triṇandam* 梵語叢書として刊行さる）が別名を *Bohisatva-Piśāvatamsaka* であるのミ全く一致する。して見るミ大疏六^{（餘五十三）}に當檢文殊梵本具足圖之ミは此の本を指したものであるべく、疏家も亦之れを見てゐたのであらうと思はれる。但し立成軌のみは彼等ミ全く別種に屬する梵本から譯されたものであるかも知れぬ。因みに *Burnouf*: *Introduction à l'histoire du Bouddhisme Indien* 481 p. 124 *Ārya Mañjuśrī*

Mhla tantra を擧げてゐるが、今原本が手元にないし、之れに相當する藏本も本學のに缺けてゐるそうだから確き決定出來ぬが内容から見て今のミ別本と思はるゝ。

以上極めて杜撰ではあるが野曼德迦に就き思ひついたまゝを述べて見た。筆を取りつゝ常に私の腦裏を去らなかつたのは此等すべての明王が最も善くシヴの性格に似通ふてゐる事である。元來明王 *Vidyajñāna* なる尊稱はしばしばシヴにも捧けられ、又かのマハーブハラタに出づる彼れが忍受苦行に讀み至るべき誰か我が不動尊のそれを類想せぬものがあらうか。密教に於て此明王こそ大自在天のような強剛難化の衆生 佛の正法に信順せざるものゝために彼れに似て暴惡忿怒の相を現し、之れを服すると言ふ。これ宗教思想發達史上から見て如何なる事實を立證するものであらうか。詳しくは Schiefner: Eine tibetische Lebensbeschreibung Gākyamuni's P. 244 於ける降三世に對する傳說的繆述、Burnout: Intro. B. I. P. 498 に於けるシヴ派ミ佛教との關係を考證せるに譲る。

但し、吾人は敢て史實を以て宗教の價值を批判してはならない。抑々密教の本義は佛自内證の自全的表現

野曼德迦に就いて

そして同時に我が純粹主觀の展開にある。此處に於て唯顯教は消極的抽象的原理を弄び、密教は當相即道の理趣に基いて表德的具象的な形式を取つたまでであるかの密徒が明王を禮拜するは、之れに即して宇宙の根本原理阿字大日を體驗せんためである。同時に彼を讃仰するは之れに即して亦内在的純粹自我に味到せんがために外ならぬ。この意味に於て、かの繪木法然の大曼荼羅も決して印度教のような單なる偶像教ではなく三昧耶までもシヴのリング等ミ全く天地霄壤の差がある。大經の五種三昧道の説、深く味ふべきである。だから我々は泰西學者のように之れを Tantric Buddhism の一サークルミして玉石混肴視したり、或は佛教の假裝せるヒンズー教だなど言ふ考へをば徹底的に排斥せねばならぬ。且又かの儀軌に見る如き殘忍、そして今日蒙滿に於て至る所、鼻を衝かんばかりにある淫猥なもの日本眞言宗にはその根跡だに認め得ぬのである。此處に於て、我々亦、かの印度の曠野に生ひ茂りし雑多の思草をば集め來つて、よく選捨しよく選取し、そして最も巧みに咀嚼しつゝ、祕密心地の大曼荼羅教を構成せる眞言列祖及び弘法大師空海の功を多きするものである。

—(大正一三・一〇(二一))—